

昔むかし、若いバラモンがいました。若いバラモンは、深い森の奥に、りっぱな賢者^{けんじや}が住んでいることを聞きました。そこで、教^しえを乞うために、賢者に会いに行くことにしました。けものに襲^{いば}われそうな茨^{いばら}のやぶの中を、何日も歩いて行きました。ようやく寂しい小屋にたどり着くと、賢者が妻とふたりで暮らしていました。賢者は喜んで弟子にしてくれました。若いバラモンは、賢者の家に住みこんで、家の仕事をしながら、賢者からさまざまなことを学びました。賢者は若いバラモンに、あらゆる種類の知恵とさまざまなふしぎな力をあたえました。

あるとき、賢者が、聖なる川^{みなもと}の源をたずねて、旅に出ました。妻のお腹に子どもがいたので、若いバラモンによく世話をしてくれるようにたのんで出かけました。

いよいよ子どもが生まれるという晩、若いバラモンは小屋の外で、無事に元気な子どもが生まれるようにと祈りながら待っていました。

とつぜん、ひとりの男が現れて、小屋の中に入っていこうとしました。若いバラモンは、びっくりして、

「そこへ入らないでください！」とさげびました。「今、先生の奥さんが、赤ん坊を生もうとしているのですよ！」

男はおどろいて立ちどまりました。自分の姿が人間に見えるとは思わなかったからです。男は神さま、創造主ブラーマだったのです。ブラーマは若いバラモンにいました。

「わたしは、ブラーマだ。これから赤ん坊が生まれるのでやって来た。おまえも知っているように、わたしは、その子の未来の運命を、誕生の瞬間に、額^{ひたい}に書きつけなければならぬ。そのわたしを見たり止めたりする者は、今までだれひとりとしていなかった」

若いバラモンは、おどろき、ひざまずいて許しを乞いました。そして、

「赤ん坊の額には、何と書かれるおつもりですか。教えてくださるまでは、中に入れることはできません」といいはりました。ブラーマは、今にも赤ん坊が生まれようとしているので、急いでいいました。

「わたしでさえ、そのとき何を書くのか知らないのだ。赤ん坊の額に鉄筆を置くと、鉄筆がその子の前世^{ぜんせ}の行いに従って、その子の運命を書くのだ。さあ、すぐに中に入れてくれ」

「分かりました。でも、帰るときに、何と書いたか教えてください」

ブラーマは承知して、すぐに家の中に入っていきました。

やがて、ブラーマは、もどつて来ると、若いバラモンにいました。

「生まれた子は男の子だ。この子は、水牛一頭と米一袋で暮らしていかなければならない」

若いバラモンは、

「なんですって。この子は偉大な賢者の息子なんですよ。水牛一頭と米一袋、それがこの子の運命なのですか」とさげびました。ブラーマは、

「わたしに何ができよう。おまえは、いま聞いたことを人に話してはいけない。もし話したら、おまえの頭はばらばらに割れてしまうぞ」といって、消え去りました。

若いバラモンは、うろたえて、苦しみましたが、だれにも話すことができませんでした。やがて、賢者が旅から帰って来て、妻が無事に男の子を生んだことを喜びました。

三年がたちました。賢者は再び、聖なる川の源をたずねて旅に出ました。このときも、聖者の妻のお腹に子どもがいました。

お産のとき、若いバラモンが小屋の外で祈りながら待っていると、ブラーマがやって来ました。若いバラモンは、ブラーマを呼び止めて、鉄筆が、赤ん坊の額に何を書いたか教えてくれるようにたのみました。ブラーマは、もどつて来るといいました。

「生まれた子は女の子だ。この子は、売春婦になって、毎晩客をとって暮らしていかなければならない。このことをだれかに話せば、おまえの頭はばらばらに割れてしまうぞ」

若いバラモンは、深く傷つきましたが、どうすることもできませんでした。

やがて、賢者が帰って来て二年たつと、今度は、若いバラモンが、ヒマラヤ山脈に向かって、修行の旅に出ました。

若いバラモンは、たくさん町の町をたずね、たくさん賢者たちと暮らし、たくさんのことを学びました。そして、二十年がたちました。バラモンは、あの賢者の所へもどろうと思いました。

もどつてみると、賢者も妻も亡くなっていて、小屋もありませんでした。バラモンは、賢者のふたりの子どもを探しました。

歩いていると、貧しい男が、一頭の水牛を引いて歩いているのに会いました。バラモンは、すぐにそれが賢者の息子だと分かりました。こっそりついて行くと、息子は、貧しい小屋に住んでいて、妻と、ふたりの子どもがいました。小屋には、米が一袋あるだ

けで、子どもたちはお腹を空かせていました。バラモンは、賢者の息子に話しかけました。

「わたしは、あなたのお父さまの弟子です。どうか、わたしの頼みを聞いてください。明日、目が覚めたらすぐに、水牛と米をぜんぶ、市場へ持って行って売ってください。そのお金でごちそうを買って、夕方までに食べつくしてください。つぎの日のためにひと口でも残してはいけません。もしお金が残ったら、貧しい人たちに食べ物をふるまうて、バラモンたちに贈り物をしてください」

息子は、

「わたしは、たった一頭の水牛で荷物を運び、それでかせいだお金で、子どもたちを食べさせているのです。どうして、商売道具の水牛を売ることなどできましょう」といいました。すると、息子の妻がいました。

「このかたは、あなたのお父さんにそっくりな賢い人のように見えます。きっとわたしたちの知らない何かを知っているでしょう。忠告に従ってみましょう」

息子は、つぎの朝、水牛と米を売りに行きました。そのお金で、家族と五十人の貧しい人やバラモンに食べさせるだけの食べ物を買いました。その日、息子は、生まれて初めて、家族以外の人たちにごちそうしました。けれども、明日食べる物は何もないので、心配で眠れませんでした。

つぎの朝、息子が目を覚ますと、納屋に、新しい水牛がいました。そばに、米が一袋置いてありました。大喜びしていると、バラモンがいました。

「さあ、水牛と米を売りに行きなさい。そして、また、みんなにすばらしいごちそうをしてあげなさい」

息子は、すぐに市場に行きました。そして、売ったお金を一文も残さないで、家族や人々にごちそうしました。こうして、息子の家では、毎朝、水牛一頭と米一袋があり、息子はそれを売ってみんなにごちそうするという日々が続きました。

ひと月たつと、バラモンはいました。

「どうか、今あなたがやっていることをやり続けてください。いっさい、自分のために取っておかないください。もし少しでもお金を貯めたりすると、あなたの幸せは終わってしまいます」

賢者の息子は、心から、バラモンの忠告に感謝しました。すると、バラモンは、

「わたしはここを去って、あなたの妹さんの所に行きます。どこにいるか教えてくださいませんか」ときました。息子は、涙を流していいいました。

「となりの村にいます。売春婦なのです」

バラモンは、となりの村に向かいました。

賢者の娘の家の戸をたたくと、娘はすぐに戸を開けました。バラモンが、

「わたしは、あなたのお父さまの弟子です」というと、娘ははげしく泣いていいいました。

「わたしは、貧しくて、男を客にとってこんな暮らしをしているのです」

バラモンはいいいました。

「どうか、わたしの頼みを聞いてください。今夜は戸にかんぬきをかけて、最上級の真珠しんじゆをまずに一杯持つて来た客だけを、家に入れてください」

娘は承知しました。そして、バラモンが行つてしまうと、戸にかんぬきをかけました。

夜になって、客がやってきて戸をたたくと、娘は、そのたびに、

「料金が値上がりしたの。最上級の真珠をまずに一杯持つて来なければ、戸を開けないわ」といいました。客たちは、あきれて帰つて行きました。夜が終わりに近付くと、娘は心配になって来ました。この村に最上級の真珠をまずに一杯持つて来られる人がいるでしょうか。客がなければ明日の食べ物を買えません。

夜明け前、もう客は来ないかと思っていると、ひとりの美しい若者が、最上級の真珠をまずに一杯持つてやって来ました。娘は若者を家に入れました。夜が明けると、若者は帰って行きました。

バラモンがやって来ていいいました。

「その真珠をすべて売って、そのお金でまずしい人たちにごちそうしてください。明日のために一文も残してはいけませんよ」

娘はいわれたとおりにしました。その晩も、あの若者が真珠を持ってやって来て、娘の家に泊まりました。

つぎの日、バラモンはいいいました。

「あなたは、神さまを夫にしたのです。毎晩、最上級の真珠をまずに一杯持つて来ることのできる人なんて、この世にはいません。これから同じことをやり続けてください。明日のために一文も残してはいけません。もし少しでも自分のために残したりすると、あなたは夫を失うことになるでしょう」

娘は、よろこんで承知しました。

ひと月たつて、娘が約束を守り続けているのを確かめると、バラモンは、修行のために旅立ちました。

旅立ちの朝、まだ暗いうちに、バラモンは歩き始めました。まもなく、月の光の中を、ひとりの美しい若者が、一頭の水牛を引いてやって来るのに会いました。米の袋を頭へのせ、包みを肩にかけていました。バラモンは、

「あなたはどなたですか」とたずねました。若者は、袋を投げ出して、泣き声でいいました。

「わたしは、この水牛を賢者の息子の所に連れていくところだ。見なさい。毎晩米の袋を運ぶので、頭がおおかたはげてしまった。それからおしやれをして真珠を持って、その妹の所に泊まりに行く。わたしの鉄筆が書いた運命のとおりにするためだ。おまえは何とこのような人間だろう」

若者は、あのブラーマでした。ブラーマは、

「いつになったら、わたしをこの重荷から救ってくれるのだ」といいました。バラモンは、

「あなたさまが、普通の暮らしと幸せを、ふたりに許さないうちは、だめでございます」と答えました。

「分かった」

ブラーマはそう答えると、すぐに賢者の息子と娘に普通の暮らしと幸せをあたえて、重荷から救われました。

こうして、運命は、人間に出し抜かれてしまいましたとさ。

おしまい

村上郁 再話

資料『インドの民話』A・K・ラーマヌジャン編／中村健訳／青土社